

ヘーゲル現象学の理念

細川 亮一 著



Ryoichi Hosokawa

Hegels Idee der Phänomenologie



創文社

ヘーゲル現象学の理念

細川 亮一 著



創文社

細川 亮一（ほそかわ・りょういち）

1947年東京都に生まれる。1970年東京大学文学部卒業。1975年東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士課程単位取得退学。1984-1986年フンボルト奨学生としてドイツ留学。1995-96年アメリカ合衆国留学。文学博士（東京大学）。

現在：九州大学大学院人文科学研究院教授。

（著書）『意味・真理・場所』（創文社、1992年）、『ハイデガー哲学の射程』（創文社、2000年）、『ハイデガー入門』（ちくま新書、2001年）、『形而上学者ウィットゲンシュタイン』（筑摩書房、2002年）

（訳書）『真理の本質について』（ハイデガー全集 第34巻、創文社、1995年）

（編書）『幸福の葉を飲みますか』（ナカニシヤ出版、1996年）

〔ヘーゲル現象学の理念〕

ISBN4-423-17136-8

2002年9月5日 第1刷印刷

Printed in Japan

2002年9月10日 第1刷発行

著 者 細 川 亮 一

発行者 久 保 井 浩 俊

印刷者 三 甲 野 隆 優

発行所 〒102-0083 東京都千代田区麹町2-6-7
電話03(3263)7101 振替 00120-0-92472

株式 創 文 社
会社

著者との申し合せにより検印省略

暁印刷・鈴木製本

略語一覽

Br	Briefe von und an Hegel, hrsg. von J. Hoffmeister.
GW	G. W. F. Hegel, Gesammelte Werke
W	G. W. F. Hegel, Werke in 20 Bänden, Suhrkamp
GA	M. Heidegger, Gesamtausgabe

序章 現象学の理念

一	現象学の三つの基本性格	三
二	構成そのものを支配した不幸な混乱	五
三	出版のトラブルとその解決	九
四	「第一部 意識の経験の学」は完成していた	二二
五	夢遊病者ヘーゲル?	二五
六	三枚重ねの透かし織りとしての現象学	二八
第一章 体系の第一部としての現象学		

第二節	原現象学と現象学体系	二四
一	体系的対応によって成り立つ体系	二五

第二節

意識の経験の学

- 一 意識の構造としての知と真理…………… 四〇
- 二 意識の経験…………… 四一
- 三 学としての意識の経験の学…………… 四二
- 四 イデアリスムスとしての経験…………… 四三
- 五 意識の経験の学という理念の故郷…………… 四四
- 六 絶対知の体系と体系の現象学的危機…………… 四五
- 七 精神の放棄による体系の生成…………… 四六
- 八 現象学と歴史哲学？…………… 四七
- 九 現象する知の学Ⅱ哲学史…………… 四八
- 一〇 概念把握された歴史Ⅱ精神哲学…………… 四九

第三節

絶対知の体系と体系の現象学的危機

- 一 精神の放棄による体系の生成…………… 四六
- 二 現象学と歴史哲学？…………… 四七
- 三 現象する知の学Ⅱ哲学史…………… 四八
- 四 概念把握された歴史Ⅱ精神哲学…………… 四九

第二章 導入部としての現象学

五	絶対精神にその無限性が泡立つ	一〇三
六	絶対知の体系	一〇五
七	意識の経験の学から精神の現象学へ	一〇七
八	体系の現象学的危機	一〇九
九	現象学体系からエンチクロペディー体系へ	一一四

第四節 論理学への導入部

一	理性の章の到達点としての論理学の次元	一一一
二	論理学と能動理性	一一六
三	理性はすべての實在性であるという意識の確信である	一二八
四	能動理性が自己を受動理性とする	一二一
五	實在哲学の生成	一二四
六	自然と有限な精神の創造以前の神の叙述	一二六
第五節	無限性としての承認	一二九
一	無限性の展開としての承認論	一三〇
二	承認の三つの段階	一三三

三	行為の二つの二重性	一二六
四	承認の構造	一二九
五	生死を賭けた戦い	一三一
六	一方的な承認としての主と奴	一三五
七	主の真理と奴の真理	一三九
第六節	理性による不幸な意識の克服と国家	一四三
一	ギリシアの人倫の喪失の意識としての不幸な意識	一四三
二	目標としての人倫の国	一四四
三	ヘーゲルの歴史意識	一四六
四	立法理性と査法理性による承認の完成	一五三
五	市民社会と国家	一五四
六	国家と絶対知	一五七
七	歴史の終りとミネルヴァの梟	一六一
八	フランス革命の哲学	一六五

第三章 歴史としての現象学

第七節	哲学史に対応する一つの歴史	一七二
-----	---------------	-----

一	歴史としての現象学の理念	一七三
二	一つの歴史としての現象学の不可能性？	一七四
三	哲学史に対応する一つの歴史としての現象学	一七八
四	不幸な意識と新プラトン主義	一八一
五	理性と近代哲学	一八四
六	繰り返しとしての精神と宗教	一八七
七	理性から絶対知への移行	一九〇
八	宗教から絶対知へあと一步？	一九五
感性的確信——知覚——悟性		一九八
一	哲学史の寄せ集め？	一九九
二	感性的確信——バルメニデスの存在からヘラクレイトスの生成へ	二〇一
三	知覚——レウキッポスの原子論	二〇三
四	悟性——プラトン『ソピステス』	二〇五
五	超感性的世界から転倒した世界へ	二〇九
第九節	自己意識とアリストテレス	二二二
一	自己意識と近代哲学？	二二三
二	フィヒテの承認論？	二二六
三	生命と欲望	二二八

四	承 認	三三
五	主 と 奴	三四
六	主奴論の到達点としての思惟の思惟	三六
七	現象学の理念	三九

終章 ヘーゲル哲学の地平

一	一つのまさに同一の哲学	三六
二	近代哲学からの解放	四一
三	ギリシア哲学	四四
四	アリストテレス哲学	四九
五	アリストテレス『デ・アニマ』	五三

註		二五七
あとがき		二九五
索引		一〇

ヘーゲル現象学の理念

序章 現象学の理念

「私の著書がついに出来上がりました。しかし私の友人たちに本を贈る際にも、出版者と印刷に関わるすべての過程を支配し、しかも部分的に構成そのものを支配した同じ不幸な混乱が生じました。……本来は導入部であるこの第一部の理念に対してあなたが何を言うか、私は知りたいと思っています」(Br.I, 161)。

一八〇七年五月一日のシェリング宛の手紙においてヘーゲルはこのように書いている。ここで「本来は導入部であるこの第一部の理念」、つまり現象学の理念が語られている。しかし「構成そのものを支配した不幸な混乱」はこの理念を覆い隠し、『精神の現象学』の解釈をめぐる不幸な混乱を引き起こした。本書の課題は現象学の理念を明らかにすることである。⁽¹⁾そのためまず現象学の基本性格を押さえないければならない。

一 現象学の三つの基本性格

シェリング宛の手紙は「本来は導入部であるこの第一部の理念」を語っている。現象学の基本性格を捉えるために、まずこの言葉に定位しよう。現象学は「本来は導入部である第一部」、つまり第一部であり、かつ導入部であ

る。しかしそれは何を意味しているのか。

「第一部 意識の経験の学」(GW9, 44)という表題のもとで、現象学は書き始められた。最終的に表題は「意識の経験の学」から「精神の現象学」へと変更されるが、第一部(体系の第一部)という基本性格は一貫している。「学の体系 第一部 精神の現象学」(GW9, 1)。つまり現象学は学の体系の第一部として構想されている。

現象学において最初に書かれた緒論において次のように言われている。「この必然性によって、学へ至るこの道がそれ自身学であり、その内容から言えば、意識の経験の学である」(GW9, 61)。現象学(意識の経験の学)は、学へ至る道、つまり学(論理学)への導入部である。しかし現象学の展開は学(論理学)の展開の必然性に対応することによって、それ自身学である、つまり学の体系に属する。ここで現象学は論理学への導入部であるとともに、学の体系の第一部とされている。この現象学の二重性格は、現象学において最後に書かれた序文においても変わらない。「学一般のこの生成、言い換えれば知のこの生成は、学の体系の第一部としての精神の現象学が叙述するものである」(GW9, 24)。現象学は学の体系の第一部であるとともに、知の生成、絶対知(論理学が展開する次元)の生成として、論理学への導入部である⁽²⁾。

現象学は体系の第一部、そして論理学への導入部という二つの基本性格を持っている。しかしさらに「歴史としての現象学」という性格を付け加えねばならない。現象学の緒論において次のように言われている。「意識がこの道において遍歴する諸形態の系列は、学への意識自身の教養形成の詳細な歴史である」(GW9, 56)。歴史としての現象学というこの性格は序文においても明確に主張されている。「個人は普遍的精神の諸教養形成段階を遍歴しなければならぬが、しかしそれは、精神によってすでに脱ぎ捨てられた諸形態としてであり、仕上げられ平らにされている道の諸段階としてである」(GW9, 25)。現象学は普遍的精神(世界精神)が歩んできた知の歴史を個人の教

養成形成として、再び歩むのである。人類の知の歴史を辿り、それによって人類の歴史を個人の歴史として取り返す「意識の歴史」、それが現象学である。

現象学の緒論と序文を通じて一貫している現象学の基本性格は、体系の第一部、論理学への導入部、歴史である。この三つの基本性格はハイデルベルク『エンチクロペディー』のうちに読み取ることができる。「私は以前、精神の現象学、意識の学的歴史を、それが純粹学の概念の産出であるが故に純粹学に先行するという意味において、哲学の第一部として扱った」(GW13, 34)。現象学は「哲学の第一部」(体系の第一部)であるが、それは「純粹学の概念の産出であるが故に純粹学に先行する」(純粹学＝論理学への導入部)という意味においてである。そして現象学は「意識の学的歴史」(歴史としての現象学)と等置されている。

以上で現象学の三つの基本性格を剔出した。この三つの基本性格はヘーゲルによって一貫して明確に主張されており、これが現象学の理念を形成している。このことは否定できない。にもかかわらず、この三つの基本性格を『精神の現象学』そのものの展開のうちに読み取することは極めて困難である。それ故現象学の理念は今日に至るまで曖昧のままに放置されてきた。何故なのだろうか。それはヘーゲル自身が語っている「構成そのものを支配した不幸な混乱」に由来するのである。

二 構成そのものを支配した不幸な混乱

「構成そのものを支配した不幸な混乱」は目次の変更に現れている。ヘーゲルは最初ローマ数字の区分に従って書き始めた。書き終わった後に、アルファベットによる区分を新たに導入した。両者を対応させよう。

I. 感性的確信、このものと私念

A. 意識

II. 知覚、物と錯覚

III. 力と悟性、現象と超感性的世界

IV. 自己自身の確信の真理

B. 自己意識

V. 理性の確信と真理

C. (A A) 理性

VI. 精神

(B B) 精神

VII. 宗教

(C C) 宗教

VIII. 絶対知

(D D) 絶対知

ローマ数字による区分は八章構成である。新たに導入したアルファベットによる区分は、Cの表題が何であれ、「意識—自己意識—両者の統一」という三区分となっている。この目次の変更は現象学の展開全体の再編成であるが、変更したということはヘーゲルにとって八章構成が体系として都合が悪いことを示している。八章構成のうちに「構成そのものを支配した不幸な混乱」を読み取ることができるだろう。ヘーゲルの体系構成の原理は三なのである。

一八〇〇年にイエナに行く前にヘーゲルは、「青年時代の理想は反省形式に、同時に体系へと変わらねばならなかった」(B.I. 59)、とシェリングに書いている。そして一八〇一年にヘーゲルはイエナ大学に一二条の就職テゼを提出している。その第二条は「推理はイデアリスムスの原理である」となっている。推理は「大前提—小前提—結論」(普遍—特殊—個別)の三項から成り立っている。それは第三条「三角形は精神の法則である」として言い表されている。⁽³⁾ヘーゲルの哲学体系が三を基本的な構成原理としていることは『エンチクロペディ』を見れば明ら

かである。ヘーゲルの最後の体系であるエンチクロペディ体系は三部構成（論理学―自然哲学―精神哲学）であり、それぞれの内部構成もその細部に至るまで、すべて三項構成である。⁽⁴⁾ヘーゲルの哲学体系はその最初から最後に至るまで、三を体系構成の原理としている。現象学の執筆時期を見ても、『イエナ体系構想Ⅱ』（一八〇四―一八〇五年）の「論理学と形而上学」において論理学は三項構成、形而上学も三項構成である。『イエナ体系構想Ⅲ』（一八〇五―一八〇六年）において自然哲学は三項構成、精神哲学も三項構成である。

ヘーゲルの体系構想の試み全体の中に『精神の現象学』を置いてみれば、その八章構成は極めて異様・異質に見える。この異質性からだけでも、最初から現象学が八章構成として構想されたという想定を疑うのに十分である。体系への視点から見れば、現象学の最初の構想（原現象学）も三を体系の原理としていたと考えられる。

しかし何故『精神の現象学』は八章構成となってしまったのか。『エンチクロペディ』第二五節のうちにこの事情を読み取ることができる。導入部としての『精神の現象学』は「単なる意識の形式的なもの」に留まりえず、「道徳、人倫、芸術、宗教といった意識の具体的な諸形態」を扱う。それ故「哲学の具体的な諸部門に属するものが、一部分すでに、導入部のうちに入ってくるようになる」（GW9, 69）。「道徳、人倫、芸術、宗教」は、精神と宗教の章のテーマである。「哲学の具体的な諸部門」とは基本的には精神哲学を意味している。精神と宗教の章は、理性までの章とは異質なのである。この異質性は『精神の現象学』での「意識の形態から世界の形態へ」という移行に示されている。精神の章の最初でヘーゲルは理性までの章と精神の章とをはっきり区別している。「精神の諸形態が今までと区別されるのは、それらが実在的な諸精神であり、本来的な諸現実態であって、単に意識の諸形態であるだけでなく、世界の諸形態でもあるからである」（GW9, 240）。「実在的な諸精神」、「本来的な現実性」という言葉は、これが實在哲学（ここでは精神哲学）に由来していることを示している。この異質性は、緒論で語られ